

【研究ノート】

絵本に描かれる図書館

Libraries on Picture Books

村主千賀*

Chika Muranushi

キーワード：絵本、図書館、司書、利用者

Key words: picture book, library, librarian, library user

要約

本研究は絵本によって図書館とは何かをいかに伝えることができるのかを検討することを目的としている。図書館や図書館員に言及する絵本を収集し書誌を作成した。それをもとに絵本の中で図書館、図書館員、本、利用者がどのように描かれているのかを調査し、構成要素を見出しカテゴリー化した。

Abstract

The aim of this study is to examine how to communicate some ideas on libraries, such as 'what is a library?'. Picture books that refer to libraries and librarians were collected and organized into an annotated bibliography. Through analysis of representation in the books, the study examined how libraries, librarians, books, and users are drawn in picture books, identified the constituent elements and categorized them.

1 研究の背景と目的

1.1 背景

図書館は、図書や雑誌、AV資料や電子資料などさまざまな資料を収集し、提供している。その中には、特定の主題について知識を得ることを目的とする資料群があり、学術的なレベルから一般的なレベルまで幅広く利用される。また、知識や情報獲得が目的ではなく、「楽しむのため」に提供される資料群がある。それらは情緒的なニーズを満たすためのものである。例をあげると、9分類（文学）や、7分類（美術・芸術）に属する著作物、作品である。

* 東海学園大学人文学部人文学科

図書館資料の中には、図書館自体についての情報や知識を伝える資料がある。それは図書館学の専門書や、図書館に関して啓蒙する資料などである。一方、「楽しみのため」の作品の中で図書館が描かれることも多い。図書館学の専門分野において、小説や漫画、映画、ドラマなどを対象に「コンテンツとしての図書館、図書館員」がどのように描かれているのかというアプローチによる研究成果が発表されている。現実の図書館とは乖離しているものや、図書館のルールから逸脱している点（たとえば個人情報の扱い方）などの問題点を指摘し論じるものがある。

1.2 研究の目的

本研究では調査対象として図書館が描かれる絵本をとりあげる。絵本は、ターゲット読者層が限定的であり、多くの絵本が対象とするのは子どもである。つまり、絵本は人が本や図書館と出会う、はじめの段階で手にする情報メディアであると言える。絵本を通じて読者（主に子ども）に「図書館とは何か」をいかに伝えることができるのかを検討していく。

ドラマ、漫画、映画などを対象とした「作品の中の図書館」に注目する一連の研究成果を踏まえ、絵本の中で図書館、本、図書館員、利用者がどのように描かれているのかを整理する。このことから読書によって形成される図書館のイメージ、生活の中で獲得される図書館に関するリテラシーがどのようなものかを明らかにする。

2 作品の中の図書館

2.1 映像作品、漫画、文芸作品の中の図書館

近年では、特に有村浩の「図書館戦争」のインパクトが大きい。「図書館戦争」シリーズはアニメ、映画として映像作品化され、またマンガ化されている。「図書館戦争」はあくまでフィクションではあるが、取り上げられる話題は「表現の自由」を軸にしたものであったり、障がい者（聴覚障がい者）問題などに触れていたりする。図書館情報学分野でも関心が高く、研究成果があがっている（安里 2011）（藤間 2008a 2008b）。映画ではアイドルが主演することなどから新作が発表されるたびに話題となることもあり、多様な人々が図書館界に注目をむける機会となった作品群である。

「図書館戦争」シリーズ以前にも、作品の中の司書や、舞台となる図書館については多くの研究や議論、作品のリストや解説が存在する。図書館が出てくる映画を「図書館映画」として、飯島が映画作品をリストアップし解説している「映画の中の書店・図書館」（飯島 1999, 2004, 2006）や、伊藤（伊藤 1991, 1993）、市村（市村 1992, 2007）の調査と論考などがある。

図書館映画だけでなく、漫画、文芸作品、アニメ、テレビドラマなどの作品中の図書館、図書館員について多くの研究がある。それらの研究は図書館を舞台とし図書館を描いたもの、図書館が重要なシーンとなるもの、主人公が図書館員である場合だけでなく、図書館を特別に取り上げ

るのではなく1シーンとして描いているもの、主人公とかかわる登場人物としての図書館員などに注目するものまである。

漫画については、図書館員の人物像、学校図書館を中心とした論考を山口が詳細に行っている(山口 2000, 2001, 2012, 2014)。山口は15年の期間にわたって図書館が描かれている漫画を収集し数百件のリストを提示している。また、「みんなの図書館」では「描かれた図書館：マンガ・児童書編」が特集された(稲葉 2014)。この特集は「夜明けの図書館」(埜納 2011-)が専門性の高いレファレンスサービスのエピソードによって展開していくため、特に図書館界では注目を集め、それ契機として組まれたと言える。特集の冒頭には作家へのインタビューがある。

文芸作品については、滝沢(1989a,b)、小西(小西 2014a,b,c,d)、後述する佐藤の論考がある。滝沢は“文学作品にみられる図書館員のイメージは一般に必ずしも高くない”ことと、“図書館のそのもののイメージも必ずしも高くないためにそうなる”と指摘している。

大澤はSFアニメの中の図書館に注目し、情報を集めるという状況説明、偶然の出会いの場、静寂のイメージとして図書館が使われることを指摘した(大澤 2007)。大澤自身は図書館員で「図書館が出てくるSFにはどんなものがあるでしょうか?」という質問に対する回答として広く情報を募ったものをベースに、「図書館SF」としてweb上で情報公開している。継続して情報を求めているが、リストは“図書館SFが発見される都度追加”されるとのことであり、最終更新時期は明記されていない。

テレビドラマについては、しばしば図書館観、図書館員の振る舞いや個人情報の取り扱いという文脈で議論が起こる(佐藤 2000)。佐藤は、作品に現れる図書館のイメージに関して「図書館はどうみられてきたか」のタイトルのもとに事例研究を中心として十数件の報告を行っているが、一連の研究の中でテレビドラマもとりあげている(佐藤 2000, 2013)。

佐藤はまたミステリ小説を対象とした研究(佐藤 1999)のように個別の作品世界を分析するもの、震災や法改正など大きな出来事があった時期の図書館の描かれ方(佐藤 2012a)、作家のプロフィールに注目した作品の分析(佐藤 2010, 2012b)など、詳細に検討している。それらの研究によって、メディアを通じた図書館イメージ形成による現実の図書館活動への影響と、図書館運営にとっての有効な素材となる見解を提示しようとしている。

様々な作品に描かれる図書館、図書館員についての論考は、どう描かれるのかという興味から、現実の図書館と照らし、なんらかの問題解決に結び付けようとするものまである。その中には「プライバシーの侵害」問題や、図書館員の人物像や振る舞いに関する表現の問題点を指摘し、図書館の自由や、図書館員の地位、専門性を強調するものも多い。しかし、作品中の「図書館的に間違った表現」を指摘することに固執せず、現実の図書館があるべき姿と市民生活への恩恵を伝えていく方策に重点をおくものもある。

2.2 絵本の特性と問題設定

草谷は、読書案内として図書館が舞台となっている絵本や、文字や言葉、本の持つ力をテーマとした絵本を紹介している(草谷 2014)。本と出会う時期に、絵本というメディアが持つ力で図書館や本の魅力を伝えようとするものである。8つのテーマから構成され、1「図書館はくつろぎと交流の場所」、2「図書館で課題解決」、3「地域のしあわせを育む図書館」、4「図書館が人生を変えた!？」、5「歴史を蓄積し、未来につなげる図書館」、6「司書の魅力」、7「生活の中にある図書館」、8「絵本で出会ったことばの力、本の力」、となっている。多様な観点から絵本によって図書館の魅力を伝え、読書と図書館利用を促している。次章で触れるが、絵本に何が描かれているのか、内容からの検索にはいくつかの課題がある。そのため、本研究とは観点が異なるが草谷の図書館にかかわる活動のなかから見出された資料群は主要な情報源となった。

「絵本と図書館」の関係については少なくとも二つのアプローチが考えられる。絵本のある場所としての図書館、つまり本と出会う場としての図書館と、「絵本に描かれる」コンテンツとしての図書館である。絵本と図書館の関わりという文脈では、例えば国立国会図書館のカレントアウェアネス(注2)を対象にキーワード「絵本」一語で検索する場合、絞込み用の関連語句として「読み聞かせ」「読書」「子ども」「図書館サービス」「児童サービス」「企画」「展示」などが上がってくる。主に「子どもと本の出会い」「ブックスタート」「読書習慣を身につける」「読み聞かせ」という話題である。これらは本と出会う施設、サービス、システムとしての図書館へ言及するものである。また最近では「災害」という語が上位に上がってくる。「図書館サービス」や「児童サービス」とそれになじむ「展示」「企画」等の語はともかく、「災害」という語との関連が強いのは、大震災後の被災地へ絵本を届ける活動が活発に行われているためである。それは、絵本のもつ力(楽しみ、癒し、知的好奇心を満たすもの、知識の伝達力)への人々の信頼のあらわれであると言えよう。

このように「本との出会い」、読書習慣を根付かせる試みなど、絵本から始まる読書は大いに期待されている。それでは、本と出会う場の一つである図書館はどのような存在であろうか。「本と出会うこと」と同時に、図書館にある絵本、その中にある「図書館」、つまり入れ子のような関係になるとき、図書館はどのような存在として表現され、伝えられるのか。図書館を知る機会、図書館リテラシー獲得の足掛かりとして、絵本の果たす役割は大きいと考え、その機能に注目していく。

3 「図書館を描いた絵本」の収集

3.1 収集範囲

本研究の対象とする絵本とは何か。世界大百科事典では、“彩色絵入りの写本類から浮世絵本、新しい画集”(世界大百科事典 2016注1)を含む広義の概念も紹介している。また、日本国語大

辞典でもいくつかの意味を紹介したあと、“(4)絵を主とした子ども向きの本”（日本国語大辞典 2016 注1）という語義を掲載している。この意味の絵本については、図書館情報学用語辞典では“絵と文からなる図書、特に絵を見ていだけで話しの筋が読み取れる連続性や、文に書き表されてない細部を絵で表現する物語性に加え、絵が芸術性を備えており、絵と文が調和して一つの物語世界を創り上げている物を指す”（図書館情報学用語辞典編集委員会 2013）と説明する。本研究ではこの定義を採用した上で範囲を拡張し、絵の描かれたものだけに限らず、写真や切り絵、コラージュ等の図画表現によるものも含むこととする。

なお、世界大百科事典では“英米ではピクチャー・ブックの語は慣用にすぎず、性格的にはイラストレーテッド・ブックと規定されており、厳密には、挿絵によって絵が主題を統一的に表現する構成をもった本を意味する”と解説しているが、図書館学の用語辞典の中では絵本の訳語として picture book が用いられている。

3.2 主題からの絵本探索の課題と情報源

図書館では絵本や児童文学について主題からの分類をしないため、「図書館について描かれた絵本」を直接検索することはできない。そこで、データベース検索においては、まずタイトル中に「図書館」が含まれるものを検索していくことになるが、図書館が出てくる絵本であってもタイトルに「図書館」を含まない場合は検索漏れとなる。また「絵本」は著作ジャンルであり、絞り込み条件として設定することができない。特に OPAC の検索においては、「図書館」「絵本」などの語がシリーズ名によく用いられるため、図書館に関する題材を扱っていかなくともヒットしてしまい、検索ノイズが非常に多くなる。

そこで、既知の絵本のタイトルを用いて WebcatPlus で連想検索を行ったところ、検索ノイズが多い上にやはりシリーズ名に検索語が含まれる問題に直面したが、未知のタイトルをいくつか得ることができた。

Google を使って「図書館を舞台にした絵本」と検索すると、個人ブログや Yahoo 知恵袋、おしえて goo などの質問・回答サイトがヒットする。それらにおいて言及されている作品は概ね重複しており、回答者が偶然知りえたものを提示するにすぎず、系統的、網羅的調査がなされているわけではない。また、滑川図書館（展示）、白川市図書館（松任図書館）の「図書館が舞台の本、小説、絵本」リスト、内灘図書館作成のリストなど、いくつかの公共図書館による展示や読み聞かせを行った形跡が見られる。実際に準備されたブックリスト、「子ども読書の日」の企画や PDF ファイルが Web 上に存在しても、断片化した情報であり、調査の一助にはなっても網羅的な情報源とは言えない。

NDL サーチでは、芦屋市立図書館の「図書館の出てくる作品」のレファレンス質問の回答事例がヒットするが、そこで得られた情報はすべて既知のものであった。

絵本のレビューと販売のサイト「絵本ナビ」の「図書館が舞台の絵本」ページでは44件（絵本ナビ 2016/9 確認）、5500万人の会員を有する世界的な規模の読者のための図書推薦サイト Good Readers の“Picture Books about the Library”（2016/9 確認）（注3）では英語で書かれた図書121件がリストされている。

絵本の解題書誌を見ると、「絵本の庭へ」（東京子ども図書館 2012）が東京子ども図書館を対象とした大部な児童図書館基本所蔵目録であるが、図書館を主題としたものは収録数1157件のうちわずか3件だけである。索引語「本」から図書館へ参照があるが、図書館から「本」への参照はないことから、「本」で索引されたものには図書館が出てこないことが示唆され、件名「図書館」が付与されたものが3件と確定できる。この目録に比して収録件数は少ないが本研究のターゲットと主題が一致するのは「絵本は語る：はじまりは図書館から」（草谷 2014）である。これは草谷が三十年以上の図書館にかかわる活動の中で見出し蓄積した「図書館」や「本」について描かれた絵本を紹介する読書案内である。100件近く紹介されているが、読書の楽しみや本の製本過程に関するものも含んでいる。

本研究では、対象とする絵本は、もともと数年来収集してきた所蔵資料に加え、その書誌情報と上記の探索で得られた書誌情報を手がかりとして収集した。既知の書誌情報から通販サイト Amazon で何点か検索、または購入し、その履歴から推薦される図書、関連書籍として提示されるものをリストアップしていくことを繰り返し、可能な限り現物入手し内容を確認した。それらを収録した書誌を表1にまとめた。

市場に流通していない絵本については、図書館での現物確認が難しい。なぜならば、公共図書館では絵本は児童サービスで提供されることが多く、消耗が激しいために資料のライフサイクルが一般図書より短いからである。それに伴い、書誌情報のみを得ている絵本に関しては表1には含まれていない。4章以下では事例として言及したものは表1のリスト番号を（ ）で示す。

4 絵本の中の図書館

4.1 表現方法：図画／文字の種類

絵本は図画と文字で構成されている。活字テキストだけで構成される資料より、ビジュアルイメージは重要である。

絵本の図画は描かれた絵（ドローイング、ペインティング）だけでなく、色紙を切ってモチーフをつくって貼り合わせたもの、写真をもちいてコラージュしたもの(6)などがある。作家のスタイルは多様で、文と絵を両方を一人で創作するもの、役割を分担するものがある。

文字について見てみると、表紙のタイトルは、和洋ともにデザインされた文字、絵と一体となるような手書き文字、活字が用いられる。ノンフィクションのタイトル表記には活字が多い。本文については日本語の場合（翻訳も含めて）は、個々のフォント名の特定はできないが、明朝体、

ゴシック体、丸ゴシック体が用いられる。外国語では、もともとアルファベットに多様なフォントが存在することもあり、本文に個性的なフォントが用いられることもあるが、おおよそ「教科書的な」一般によく見かけるフォントが用いられており、手書き文字はなく活字である。日本語でも、アルファベットでも、図画の中の文字には、手書きがある。英語では筆記体で描かれているものもある。

4.2 図書館の構成要素からみた絵本：図書館員、利用者、図書館、コレクションについて

4.2.1 図書館員

収集した絵本は図書館を主題とするもの、図書館を舞台にしたものだけでなく、図書館がお話の文脈にうめこまれているものもある。いずれの場合も、図書館がどのように描かれているのかを探る手掛かりとなるので、それらについて図書館の構成要素からみていく。

図書館が出てくるからといって、必ずしも図書館員が登場するわけではないが、まず、図書館員からとりあげる。実際に図書館で働いている者を図書館員とするが、そのすべてが有資格者の司書というわけではない。絵本の中でも有資格者の司書であるのかそうでないのかという地位を明らかにしているものと、そうでないものとある。「ししょの〇〇」(21)と明示される場合もあるし「図書館のおねえさん」(26) (58)というように呼び、それが司書かどうかはわからないものもある。翻訳図書では図書館員と表現されることが多い。

図書館が舞台になっても、図書館員が主人公になることは少なく、もっぱら主人公との関わりの中で登場する。あるいは単に主人公が本を貸出／返却するカウンターにいる人として描かれるだけのことも多い。

ノンフィクションでは、「図書館員」や「司書」とは呼ばず、「本を主人公たちにもたらす人」という存在もある。彼らは図書館という「館」に属するのではなく、遠隔地へ本を届ける人物として登場する。その場合それは「ブックウーマン」(67)「ろばのとしよかん」(82)など、その都度固有の呼び名でよばれる。

図書館員は、人間または動物のキャラクターで登場する。利用者との関係からみると、人間同士、人間の図書館員－動物の利用者、動物の図書館員－人間の利用者、動物の図書館員－動物の利用者というパターンすべてがある。

描かれている図書館が、施設、機関としての図書館ではなく、「本がたくさんあるところ」の比喩である場合、図書館員も司書も登場しない。一人暮らしのおばあさんが、タヌキに本をよんでやる(78)というようなものである。強いて言うなら、おばあさんは児童サービス担当、あるいは読み聞かせ担当ということになる。

図書館員は人間の場合女性、男性両方登場する。年齢には幅がある。“つりメガネにタイトスカート”がステレオタイプの図書館員であるといわれるが、服装やタイプに特徴的な傾向がある

わけではなく、太った人、痩せた人、長い髪、メガネをかけている、メガネをかけていない、など多様である。つりめがねにタイトスカートの図書館員が登場することもある(9)(63)。動物では、性別や年齢が不明のことがあるが、姿勢とスカートとメガネ着用で「年配の女性図書館員」(38)に擬人化されていると見分けができることもある。

4.2.2 利用者

図書館の利用者は、人間、動物、それ以外(おばけ、恐竜など)が登場する。人間の図書館を人間と一緒に利用する動物もいれば、動物の図書館を人間が利用することもある。

人間の利用者は子どもが多く、それは、絵本のターゲットとする年齢層と合致していると考えられる。主人公は男の子、女の子、人種は多様である。動物の利用者は性別、年齢ははっきりしないことが多い。服を着ていれば性別が識別できる場合もある。閉館後の図書館を訪れる「利用者」として、動物のキャラクターが人間の図書館を利用することがある。彼らは夜の図書館でこっそり本を読んだり、調べ物をしたりする(28)。動物の利用者は時には人間の利用者と交流することもある(45)。

利用者の心情や性格は多様である。さびしい女の子(74)、退屈している男の子(24)(35)(68)、好奇心旺盛な子(37)(58)と様々である。本の世界に触れて気持ちが晴れる、知的好奇心、冒険心が満たされる存在として描かれる。

外国の絵本で、現在の日常の設定では、子どもが一画面に大勢登場する場面は、髪の色、肌の色が異なる子どもが複数描かれる。また車いすの子どもも一緒にいる姿が描かれている(4)。“公共図書館のサービスは、年齢、人種、性別、宗教、国籍、言語、あるいは社会的身分を問わず、すべての人が平等に利用できるという原則に基づいて提供”され、“理由は何であれ、通常のサービスや資料の利用ができない人々、たとえば言語上の少数グループ(マイノリティ)、障害者、あるいは入院患者や受刑者に対しては、特別なサービスと資料が提供されなければならない”(UNESCO 1994)ものであることを端的にあらわしているといえる。Historical fictionの中の子どもは、貧困社会に属する人(25)、黒人(65)(66)(83)、都市部から離れて暮らす人(29)(67)(82)である。彼らにとって図書館の利用、本と接することが困難であった歴史、本から得られる知識や図書館の自由利用がいかに尊いかをその姿を通して伝えている。

4.2.3 図書館とコレクション

図書館が舞台となる場合と、主人公の生活環境の構成要素の一部として描かれる場合がある。主人公はよく図書館で本を読み、借りたり返したりするところとして描かれる。図書館のコレクションは読書のためのものである。一方、主人公が「しらべものをしに」行くこともある。その場合、コレクションは「調べもの」のためのレファレンスツールが利用され、レファレンスサー

ビスが機能していることが示唆される。図書館は読書だけではなく、課題解決の場である。

ファンタジー作品では、図書館自身がファンタジーの装置である場合と、読書行為によってお話が展開する場合がある。後者は主人公が本の中の世界へ入っていくパターンと、本の中から現実世界へ人や動物が出てくるパターンがある。図書館が舞台であっても、主人公が「本」に出会い、その世界の中に入っていってしまうと、図書館はそれ以上描かれない。主人公にとって図書館はもとの世界の「本を読む場所」であって、お話の外の世界、現実世界の象徴として描かれる。

「としょかんねずみ」のシリーズでは、擬人化された主人公のねずみのサムが図書館をあますところなく使いこなす。サムが利用するのは人間の図書館である。閉館後の図書館で本を読み、自らお話を創作し、百科事典を調べ、専門書を読み調べ、工作物（家の模型）を創造し展示する。図書館ねずみで描かれる図書館は、読書の場であり、課題解決の場であり、創造の場であり、表現の場であり、それは現実の図書館のあるべき姿をよく伝えている（45 - 49）。

4.3 絵本の内容：伝えられることからの区分

4.3.1 オリジナルな創作か、史実／事実に基づくお話か(historical fiction)

前述したように、絵本は主題からは分類せず、科学の本、知識の本か、お話の本という区分をすることがある。図書館の使い方、マナー、図書館とはどういう機関／施設かという知識や情報を伝達する意図のあるものは知識の本に区分できる。それらはお話仕立てのタイプと、便覧、ハンドブックの構成に近いもので、知的ニーズを満たすものである。

お話の本は、オリジナルな創作か、史実／事実にもとづくお話かという区分ができる。創作されたファンタジーやミステリ、日常の中の本の楽しみを描く作品は情緒的ニーズを満たすものである。

史実・事実に基づくお話は、①図書館や本にまつわる知識を伝える、②人種差別、貧困層にとっての図書館③戦火や略奪から図書を守り伝えることの大切さを伝える、④アウトリーチ、⑤図書館の楽しいエピソードなどである。

4.3.2 お話形式の知識の本

上記で示した①のタイプの絵本の事例をあげる。図書館や本に関する歴史をおはなし仕立てで紹介するものがある。修道士ユーゴの物語(2)は、クマに重要な写本を食われてしまった逸話をもとに、中世の修道院での写本制作の世界が描かれている。読み物としても楽しいだけでなく、学術的な裏付けのある描写がなされている。中世の本の世界が修道院を中心としていたこと、羊皮紙、羽ペンといった本の材料や道具にいたるまで写本の知識が伝えられる。

「カエサルくんと本のおはなし」では、主人公が図書館で読んでいる本の中から、外の世界へ(図書館)へカエサルが飛び出してくる。ここでカエサルは知識を語る人であり、ローマの歴史の

語り手ではない。カエサルが考案した本の形式にはじまり、「本」の歴史を語っていく(10)。

4.3.3 啓発、メッセージ：図書館が人を守る、図書館を人が守る

②の事例として、アメリカを舞台に、黒人を主人公としたシリーズがある(65)(66)(83)。

人種による偏見や差別を受けない自由な図書館利用とその意義が描かれる。日本語訳のカバー、帯には“黒人の子どもたちを主人公に、本を読む楽しさや図書館の魅力について描いた”絵本と紹介されているが、これらは単に図書館の魅力を知らせているのだけではない。図書館は人種偏見や差別と立ち向かいながらも訪れる価値のある、大切な場所であり「とくべつな」場所である。「読書は自由への入り口」と信じ図書館へ通った著者のあとがきにある通り(83)、困難な状況から本を手にし、知識と言葉の力を勝ち取り生き抜いた人々の物語は強いメッセージを放つ。

図書館利用は年齢でも差別されないこと、児童サービスの先駆者の物語(43)、言語で差別されないこと(58)などがある。

貧しい生活のため、学校へ通えなくなった少年が風力発電装置を廃材から作り出す実話では、課題解決のために図書館が有効なことを示し(25)、また貧富の差なく図書館が自由に利用できることを伝えている。開発で遊び場を追いやられた貧困層の子どもたちの居場所として図書館が描かれるものがある。資料は利用しないが、司書は彼らの相談役となった(77)。

③の事例は、イラク戦争において戦火から図書館のコレクションを守った女性司書アリアの物語がある(32)(61)。戦争が終わり新しい自由のときが来るまで図書館員の手で本が守られていくことを伝えている。*Hands Around the Library*(6)では現代のエジプトのアレクサンドリア図書館を守った人間の鎖を描いている。これらの絵本は戦争や暴力から図書館を守ることの意義と、図書館の価値を伝えている。図書館は図書館員だけでなく、時には人々の手で守られていくことがわかる。

4.3.4 アウトリーチ：読者のもとへ必ず本を届ける

コロンビアのロバの図書館がある(29)(82)。図書館がない遠隔地域へロバに本を乗せて訪ねていく。ロバの図書館を子どもたちが心待ちにする様子が描かれる。また、世界各国におけるアウトリーチサービスを紹介する絵本ではロバだけでなく、舟、馬、図書館バスなどによる遠隔地サービスが紹介される(56)。「ぼくのブックウーマン」(67)では、地方の子どものいる家庭に本を届ける女性と子どもの関係を描いている。史実に基づく話ではないが、アウトリーチを描いたものとして日本を舞台にしたものでは、北海道を舞台とした図書館バスの話がある(76)。図書館は、本を求めながら身近に図書館がない人々にとっては、待ち遠しい存在である。

4.3.5 図書館で実際に起こった楽しいお話

「としょかんねこ デューイ」(44) は、図書館の返却ポストへ捨てられた子猫のものがたりである。この実話は図書での出版もされるほど有名な逸話である。猫の名前デューイは、十進分類法 (DDC: Dewey Decimal Classification) の考案者にして、公共図書館運動で図書館史に名を残すメルヴィル・デューイにちなんでいる。図書館学を学んだものには、すぐにピンとくる図書館の巨人から名をもらったデューイは愛される図書館猫の第一人者である。

「カモシカ図書館」(26) は図書館開館 10 年を迎えた富山県舟橋村の図書館で実際に起きた事件をベースに描かれている。この珍事を「カモシカもお祝いにやってきた」ととらえ、10 周年の記念として絵本にすることになった。このエピソードから楽しく温かい図書館の雰囲気が伝わる。

4.4 図書館利用について：マナー、リテラシー

4.4.1 お話で伝える図書館の利用

マナーを伝えることを意図して書かれたもの (10) と、たとえば図書館の静寂を保つマナーについて、作品中「しずかに」という声をかけるシーンや、「走ってはいけません」と呼びかける (4)、吠えてしまったライオンが図書館を出入り禁止になるというエピソード (9) で描くなど、図書館マナーがお話の文脈に埋め込まれている場合がある。図書の返却に関して、返却日を押すシーンで貸出には期日があることが伝わり (54)、延滞について「なにがなんでも返却期日までに返す」ことにまつわる騒動 (33) や「延滞はとても罪深い」と不安になる心情 (63) が描かれたりする。これらのことから館内では静かにすべきであり、借りた本は失くしてはいけないということがわかる。「としょかんのよる」(53) では擬人化したねずみときつねのやりとりから、図書館の本はみんなのものだから独り占めにできない、貸出には冊数制限があり、期日までに返す、という図書館利用の基本ルールがわかる。また字が読めなくても絵本を見たり、CD ブックで聴いたりして、お話を楽しむことができることがわかる。

図書館の利用法に関して、図書館の利用で課題解決の場として「わからないことは図書館でよく」「しらべることができる」ということを描いているものがある (25) (47) (62)。自分で本を調べて探したり、司書に手伝ってもらったりする。また、特定の図書館システムを伝えるものがある。*Bob the Alien Discovers the Dewey Decimal System* では、宇宙人のボブに DDC の仕組みを教えるお話を通して、書架分類のしくみを伝えている。おさるのジョージ (21) では本の分類法について、様々な分類観点を示しながら書架分類がどのようなものか伝えている。

4.4.2 メディアとして絵本を利用する

表 1 の (84) から (92) まで示したもののように、内容は図書館リテラシー獲得のためのテキスト、調べ学習のドリルやワークブックで、図画を多用した大型本という絵本の形式をとるものがある。絵本が本来もつ「親しみ」やすさや、遊びながら学ぶことで図書館リテラシーを身につけること

を意図するものである。また、写真や図版を多用した説明的なもの(39)(70-73)は知識の本で、便覧形式の利用ができる図書として機能する。お話を読むのではなく、ワークブックでもないが、ヒントを手がかりに様々な作品や登場人物をさがしていくゲーム形式の読書案内となっている絵本もある(64)。

5 まとめと今後の課題

本研究では、表1であげた絵本を調査し、絵本の中でどのように図書館を描いているかを整理した。構成要素に着目しながら、図書館の描かれ方という点からグルーピングを試みた。

しかしながら、表1には、日本語で書かれたもの、翻訳され日本で出版されたもの、若干の原書(洋書)を含んでいる。翻訳絵本は、日本語で読むことができるからといっても、原著作の書かれた社会における図書館の在り方、司書の地位、それをとりまく文化的、歴史的背景は日本のそれとは異なる。受け手と社会的文脈の差異、受け手の知識によってメッセージには大きな差異が生じることも考えられる。今後、「図書館がいかにか描かれるか」を分析する視点に加え、諸外国との差異および普遍的な図書館の魅力という見方を加えて検討していきたい。

また、主に英語の絵本であるが、探索中に多くの作品が電子出版(Kindle版)されていることがわかった。収集や保管のメリットを考えると電子化の意義は大きい。しかし、たとえば見開きいっばいに書架が描かれる場面がページ切れしては魅力が損なわれるのではないか。絵本は読み聞かせなどの場面を考えると、大きさや色や雰囲気といった要素は重要である。その点で電子化された絵本がどのように利用されるのかも検討課題である。

引用文献リスト

- 安里のり子, 根本彰, 2011. 小説『図書館戦争』と「図書館の自由に関する宣言」の成立. 日本図書館情報学会誌 57(1):19-32
- 飯島朋子, 1999. 映画の中の図書館: Library Cinema. 日本図書刊行会.
- 飯島朋子, 2004. 映画の中の本屋と図書館. 日本図書刊行会.
- 飯島朋子, 2006. 映画の中の本屋と図書館: 後編. 日本図書刊行会.
- 市村省二, 1997. 映像メディアの知的活用法を探る: 図書館・図書館員が登場する映画を題材として. 図書館雑誌 86(1) 33-35
- 市村省二, 2007. 図書館・図書館員が登場する映画に関する情報源
- 伊藤俊朗, 1991. 映像表現における図書館と図書館員像に関する論考 視聴覚資料研究 2(3) 120-12
- 伊藤俊朗, 1993. 映像メディアにおける図書館員像. 視聴覚資料教育 47(6):22-27
- 稲葉雅子(編), 2014. 【特集】描かれた図書館: マンガ・児童書編. みんなの図書館 2014(5):3-31
- 大澤類里佐, 2007. 本は永遠に? SFアニメの中の図書館. 大学の図書館 26(5):66-67

- 草谷桂子, 2013. 絵本は語る：はじまりは図書館から. 子どもの未来社.
- 小西信和, 2014a. 文芸作品に描かれた「図書館」入門. 古書通信 1017; 2-4
- 小西信和, 2014b. 図書館めぐり：文芸作品に描かれた「図書館」入門2. 古書通信 1019; 4-6
- 小西信和, 2014c. 図書館めぐり・続：文芸作品に描かれた「図書館」入門3. 古書通信 1021; 12-13
- 小西信和, 2014d. 詩歌の中の図書館文芸作品に描かれた「図書館」入門. 古書通信 1017; 2-4
- 佐藤毅彦, 1999. 図書館はどうみられてきたか：日本のミステリと図書館員-東野圭吾・法月綸太郎のケースについて. 甲南女子大学研究紀要(36); 55-179
- 佐藤毅彦, 2000. 図書館はどうみられてきたか(2)テレビドラマ『ビューティフルライフ』における「図書館、観の批判的検討. 甲南女子大学研究紀要(37); 105-135
- 佐藤毅彦, 2010. 図書館員出身作家のメンタリティ：女性作家が描く女性図書館員像 図書館はどうみられてきたか 7 甲南女子大学研究紀要文学・文化(43); 65-81
- 佐藤毅彦, 2012a. 2011年東日本大震災の年に図書館はどのように描かれたか：映像メディアとコミック、文芸作品に登場した図書館員に関する事例研究. 甲南国文, 59; 1-12
- 佐藤毅彦, 2012b. ライター出身作家の描く図書館：北森鴻のケースについて 図書館はどうみられてきたか 12. 甲南女子大学研究紀要. 文学・文化編; (48), 1-12
- 佐藤毅彦, 2013. テレビドラマの図書館員「もう一度君に、プロポーズ」を中心に 図書館はどうみられてきたか 13. 甲南女子大学研究紀要文学・文化(49); 51-62
- 滝沢正順, 1989a. 文学に現れた図書館と図書館員(1). 図書館界 1989(5) 10-23
- 滝沢正順, 1989b. 文学に現れた図書館と図書館員(2). 図書館界 1989(9) 135-144
- 東京子ども図書館編, 2012. 絵本の庭へ：児童図書館基本蔵書目録1. 東京子ども図書館
- 藤間真, 2008. 『図書館戦争』にとける非暴力的戦いについての考察. 桃山学院大学環太平洋圏経営研究 9; 213-229
- 藤間真, 家瀬順一, 志保田務, 2008. 『図書館戦争』シリーズの表現に関する図書館情報学的考察. 図書館界 60(2), 143-152
- 日本図書館情報学用語辞典編集委員会編, 2013. 図書館情報学用語辞典 第4版. 丸善.
- 桒納タオ, 2011-2016. 夜明けの図書館. 1-4 双葉社 (*継続中)
- 山口真也, 2000. 漫画にみる学校図書館と学校図書館職員のイメージ. 沖縄国際大学日本語日本文学研究 5(1), A1-A33
- 山口真也, 2001. 漫画にみる図書館職員の人物像(1990年代以降) 沖縄国際大学日本語日本文学研究 5(2), A1-A33
- 山口真也, 2012. 漫画の中の学校図書館と「図書館の自由」：「第3 図書館は利用者の秘密を守る」との関係性を考えるために 沖縄国際大学日本語日本文学研究 17(1), 35-59
- 山口真也, 2014. 心に残る図書館マンガ・いま読みたい図書館マンガ. みんなの図書館, 2014(5), 25-27
- UNESCO, 1994. UNESCO Public Library Manifesto 1994
(ユネスコ 公共図書館宣言 1994 採択、日本語訳は日本図書館協会ホームページ
<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/237/Default.aspx>)

注1 データベースによる辞書の参照

世界大百科事典 ジャパンナレッジ (2016/10/20 確認)

日本国語大辞典 ジャパンナレッジ (2016/10/20 確認)

注2 カレントアウェアネス <http://current.ndl.go.jp> (2016/10/20 確認)

注3 絵本ナビ 図書館が舞台の絵本 <http://www.ehonnavi.net/special.asp?n=2396> (2016/9/6 確認)

Goodreaders Picture Books about the Library! (2016/9/20 確認)

http://www.goodreads.com/list/show/724.Picture_Books_about_the_Library_

表1. 図書館・図書館員が描かれる絵本

No	Title	Author	Illustrater	Translator	Year	Publisher
1	A library book for Bear	Becker, Bonne	Denton, kady MacDonald		2014	Candlewick Press
2	Bob the Alian Discovers the Dewey Decimal System	Donovan, Sandra	Haake, Martin		2010	Picture Window Books
3	Brother Hugo and The Bear (ユーゴ修道士と本を愛しすぎたクマ)	Beebe, Taty	Schindler, S.D	千葉茂樹	2014	Eerdmans Books for Young Readers
4	Do Not Bring Your Doragon to the Library	Gassman, Julie	Elkerton, Andy		2016	Picture Window Books
5	Goldie Socks and the Three Librarian	Hopkins, Jackie Mims	Mandders, John		2007	UpstartBooks
6	Hands Around the Library	Rothe,Susan L / Abouraya, Karen Leggett	Roth, Susan L..		2012	Dial books for Young Readers
7	Librarian on the Roof : A True Story	King, M.G	Gilpin, Stephen		2010	Albert Whitman & Campany
8	Library Lil	Williams, Suzanne	Kellogg, Steven		1997	Puffin Books
9	Library Lion [としょかんライオン]	ミシェル・ヌードセン	ケビン・ホークス	福本友美子	2007	岩崎書店
10	Manners with a Library Book	Tourville, Amanda Doering	Lensch, Chris		2009	Picture Window Books
11	Miss Books Loves Books(and I Don't)	Borrner, Barbara	Emberley		2010	Alferd A Knopf
12	MissDorothy and Her Book Mobile	Houston, Gloria	Lamb, Condie		2011	Harper
13	Our Librarian won't Tell us Abything!	Buzzeo, Toni	Yoshikawa, Sacihko		2006	UPstartBooks
14	Penelope Popper: Book Doctor	Buzzeo, Toni	Christy, Jana		2011	UpstartBooks
15	The Library	Stewart, Sarah	Amall, David		1995	Square Fish
16	The Not So Quiet Library	Ohara, Aachariah			2016	Daial Books for Young Readers
17	The Shelf Elf	Hopkins, Jackie Mims	Thornburgh, Rebecca		2004	UpstartBooks
18	あこがれうちゅうひこうし	ミケラ・マンティン	ジョー・イワーズ	しばたよういち	1994	フレーベル館
19	アンディとライオン	ジェイムズ・ドーハティ	ジェイムズ・ドーハティ	村岡花子	1961	福音館書院
20	うみのどうぶつととしょかんせん	菊池俊	こばようこ		2012	教育画劇
21	おさるのジョージととしょかんのおしごと	マーガレット・レイ/ ハンスアウグスト・レイ		北山めぐみ	2013	金の星社
22	おさるのジョージととしょかんへいく	マーガレット・レイ/ ハンスアウグスト・レイ		福本友美子	2006	岩波書店
23	おばけのマールとみんなのととしょかん	けーたろう	なかいれい		2015	中西出版
24	カエサルくんと本のおはなし	いけがみしゅんいち	せきぐちよしみ		2015	福音館書院
25	風をつかまえたウィリアム	ウィリアム・カムクワンパ/ ブライアン・ミニラー	エリザベス・ズーノン	さくまゆみこ	2012	さ・え・ら書房
26	カモシカととしょかん	魚背ゆう子	水上悦子		2009	桂書房
27	きんぎょ	ユ・テウン		木坂涼	2009	らんか社
28	コウモリととしょかんへいく	ブライアン・リース		さいごうようこ	2011	徳間書店
29	こないかならばのととしょかん	モニカ・ブラウン	ジョン・バッラ	斉藤規	2012	新日本出版
30	ごほん!ごほん!ごほん!	デボラ・プラス	ティファニー・ピーク	おがわひとみ	2005	評論社

31	さみしかった本	ケイト・バーンハイマー	クリス・シーバン	福本友美子	2013	岩崎書店
32	3万冊の本を救ったアリーヤさんの大作戦	マーク・アラン・スタマティエ		徳永里砂	2012	国書刊行会
33	ステラのえほんさがし	エルスト, リサ, キャンベル		藤原宏之	2006	童心社
34	大草原のとしょかんバス	岸田純一	梅田俊作		1996	岩崎書店
35	翼の時間	東逸子	東逸子		1995	ミキハウスの絵本
36	ティモシーとサラ ちいさな としょかん	芭蕉みどり			2015	ポプラ社
37	図書館だいすきーメキシコ	デルマタ・アビレス	デルマタ・アビレス	清水透	1996	蝸牛社
38	としょかんたんていゆめきちくん	J-B・パロニアン	L.L. アファノ	佐藤見果夢	1999	評論社
39	図書館ってすごいな (わくわく図書館 5)	笠原良郎・紺野順子	写真と絵		2010	アリス館
40	図書館ってどんなところ (わくわく図書館 2)	紺野順子	こばようこ		2010	アリス館
41	図書館ってどんなところなの (図書館へいこう1)	赤木かん子	すがわらけいこ		2007	ポプラ社
42	図書館で調べよう (わくわく図書館3)	紺野順子	こばようこ		2010	アリス館
43	図書館に児童室ができた日:アン・キャロル・ムーアの物語	ジャン・ピンポロー	デビー・アトウェル	張替恵子	2013	徳間書店
44	としょかんねこデューイ	ヴィッキー・マイロン/ プレット・ウウイター	ステイヴ・ジェイムズ	三木卓	2012	文化出版局
45	としょかんねずみ 1 (Library Mouse)	ダニエル・カーク		わたなべてつた	2012	瑞雲舎
46	としょかんねずみ 2 (Library Mouse)	ダニエル・カーク		わたなべてつた	2012	瑞雲舎
47	としょかんねずみ 3	ダニエル・カーク		わたなべてつた	2013	瑞雲舎
48	としょかんねずみ 4	ダニエル・カーク		わたなべてつた	2014	瑞雲舎
49	としょかんねずみ 5	ダニエル・カーク		わたなべてつた		瑞雲舎
50	図書館のはじまり・うつりかわり (図書館のすべてがわかる本 1)	秋田喜代美	写真と絵		2012	岩崎書店
51	図書館のみみつ	高田高史	写真と絵		2016	PHP 研究所
52	図書館の役割を考えてみよう (図書館のすべてがわかる本 2)	秋田喜代美	写真と絵		2012	岩崎書店
53	としょかんのよる	ローレンツ・パウリ	カトリン・シェーラー	若松宣子	2013	ほるぶ社
54	としょかんへいくビーブちゃん	クレシッダ・コウエル		佐藤見果夢	1999	評論社
55	としょかんへいこう	斉藤洋	田中六大		2015	講談社
56	図書館ラクダがやってくる	マーグリート・ルアーズ		斉藤規	2010	さ・え・ら書房
57	図書館をもっと活用しよう (図書館のすべてがわかる本 4)	秋田喜代美	写真と絵		2013	岩崎書店
58	トマスと図書館おのおねえさん	バット・モーラー	ラウル・コーン	藤原宏之	2010	さ・え・ら書房
59	トリケラとしょかん	五十嵐美和子			2013	白泉社
60	日本と世界の図書館を見てみよう (図書館のすべてがわかる本 3)	秋田喜代美	写真と絵		2013	岩崎書店
61	バスラの図書館員:イラクで本当にあった話	ジャネット・ウインター		長田弘	2006	晶文社
62	はちうえはほくにまかせて	ジーン・ジオン	マーガレット・プロイ・グレアム	もりひさし	1987	ペンギン社
63	ピバリーととしょかんへいく	アレクサンドラ・スタッドラー	アレクサンドラ・スタッドラー	まえざわあきえ	2003	文化出版局
64	ページマスター リチャードの図書館大冒険	デイブ・グレッグ	デイブ・グレッグ	唐沢則幸	1995	フレーベル館
65	ぼくが一番望むこと	マリー・ブラットリー	クリス・K・スーンビート	斉藤規	2010	新日本出版
66	ぼくの図書館カード	ウィリアム・ミラー	グレゴリー・クリスティ	斉藤規	2010	新日本出版
67	ぼくのブック・ウーマン	ヘザー・ヘンソン	デイビッド・スモール	藤原宏之	2010	さ・え・ら書房
68	ポチポチのとしょかん	川井ゆり子			2003	文溪堂
69	本、だーいすき!	ジュディ・シエラ	マーク・ブラウン	山本敏子	2013	新日本出版
70	本と図書館の歴史	モーリー・サワ	ビル・スレイヴィン	宮本陽子/小谷正子	2010	西村書店
71	本のせかいへ (わくわく図書館 1)	笠原良朗	太田大八		2010	アリス館

72	本のれきし 5000 年	辻村益朗			1989	福音館書院
73	ほんはどうやって探したらいいの (図書館へいこう2)	赤木かん子	すがわらけいこ		2007	ほぷら社
74	ほんをひらいて	トモリス/スレイドモリス	シドラ・ストリックランド	さくまゆみこ	2014	ほるぶ社
75	ママのとしょかん	キャリ・ベスト	ニッキ・ディリー	藤原宏之	2011	新日本出版
76	みさきめぐりのとしょかんバス	松永伊知子	梅田俊作		1996	岩崎書店
77	道はみんなのもの	クルーサ	モニカ・ベルト		2013	さ・え・ら書房
78	山のとしょかん	肥田美代子	小泉るみ子		2010	文研出版
79	夢の図書館 (わくわく図書館 4)	笠原良郎	いとうみき		2010	アリス館
80	よるのとしょかん	カズノコハラ		石津ちひろ	2013	光村教育図書
81	よるのとしょかんだいぼうけん	中村李衣	北村裕花		2015	BL 出版
82	ろばのとしょかん	ジャネット・ウインター	ジャネット・ウインター	福本友美子	2011	集英社
83	わたしのとくべつな場所	パトリシア・マキサック	ジェリー・ピンクニー	藤原宏之	2010	新日本出版
84	調べるためのアイデアガイド (情報名人になろう 1)	堀田龍也 (編)	安土じょう		2001	汐文社
85	パソコンなどを使って調べよう (情報名人になろう 2)	堀田龍也 (編)	安土じょう		2001	汐文社
86	集めた情報をまとめよう (情報名人になろう 3)	堀田龍也 (編)	安土じょう		2001	汐文社
87	ホームページなどで発表しよう (情報名人になろう 4)	堀田龍也 (編)	安土じょう		2001	汐文社
88	図書館の達人! 本の探し方がわかる事典: 調べるのがおもしろくなる	金中利和	写真: 国際ことも図書館		2007	PHP
89	図書館へいこう: 図書館クイズ1 知識と情報の宝庫 = 図書館活用術	五十嵐絹子 (編)			2007	国土社
91	図書館へいこう: 図書館クイズ2 魅力的な図書館委員会の活動・図書館行事のアイデア集	五十嵐絹子 (編)			2011	国土社
92	ほんで調べてほうこくしよう	赤木かん子	mittyy		2011	ポプラ社

注 リストは no. 83 までタイトル昇順、84~92 までは絵本形式のテキストやワークブックとみなされるものを付記した